

"A Pure Woman"としてのテス：イギリス文学の中の女性像

著者	御輿 哲也
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	59
ページ	159-172
発行年	2004-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000677/

“A Pure Woman” としてのテス

—イギリス文学の中の女性像—

御 興 哲 也

1

19世紀後半から世紀末にかけてのイギリス社会に、「新しい女」と呼ばれる、経済的にも精神的にも自立した生き方を目指し、旧来のヴィクトリア朝的女性観に叛旗をひるがえす女性たちが数多く登場したことは、一般によく知られている。そして、その新しい社会現象とも言うべき女性観の変化をもたらす直接の原因となったものが、どうやら若い男女の数に生じたアンバランスという、何とも散文的でありながら、だからこそ強迫観念的に喧伝されやすい事実であったことについても、すでに多くの指摘がなされている。

1851年のセンサス報告書が、男性に対する女性の数の過剰（約51万人）を明らかにして以来、統計的に結婚不可能な「余った女」の存在は無視できない社会問題であった。……その後、世紀後半に向かうにつれて、15歳以上の過剰の女性数が増え、女が夫を見つけられない事実は、これまでのようにたんなる個人的落度ないし不幸として片づけられなくなったのである。……ここから、女性の役割や地位や本質の見直しがうながされ、＜新しい女＞の理想像が希求されるのは当然の帰結であろう¹⁾。

男女数の不均衡の背景には、植民地など海外への移住や赴任、伝染病による死亡など、いくつかの事情がからんでいたようだが、いずれにしても、それまで仕事をもったり社会活動に従事したりすることが稀だった女性たちにとって、きわめて大きな意識改革を迫られる事態であったことは間違いない。

1) 川本静子『＜新しい女たち＞の世紀末』（みすず書房、1999）、PP.27-29。

ただし、もちろんこの時期のイギリスで、その種の「意識改革」の問題が、社会のあらゆる階層に満遍なく降りかかったというわけではない。改革の中心的な担い手は、あくまでもロンドンなどの都市およびその周辺部に住む中産階級以上の、比較的恵まれた階層の女性たちに限られていたと考えるべきであろう。富山太佳夫氏も言うとおおり、「世紀の変わりめの＜新しい女＞は、言うまでもなく、都会の産物であった。」²⁾ たたとえば地方の農家に生まれた娘たちならば、早い時期から当然のように農作業を手伝い、家畜の世話や田畑の維持管理に日々追われていたに違いないはずで、ただ「女性の労働」などところごとしく意識化しなかっただけのことだろう。またその一方で、都会の町工場などでも、「熟練工」や「準熟練工」と呼ばれる女性労働者は、かなり以前から相当数存在していた。ケロウ・チェズニーが皮肉をこめて言うように、「上流社会では、客のもてなしが巧みな女主人や黒幕的に策動する女性たちの力が幅をきかせ、また社会の底辺では、蒸気機関時代の産業が相変わらず大量の女性の労働力を必要としていた」³⁾ のだ。いわば中産階級をはさみ討ちにする形で、社会の上層部と底辺において、たがいにまったく異質な機能を帯びながらも、女性たちはむしろ積極的・能動的な社会参加を続けていたわけで、そう考えると、いわゆるヴィクトリア朝的女性の理想像としての「家庭の天使」なるものが、いかに限られた社会階層にのみ通用する白々しいフィクションにすぎなかったかを、あらためて思い知らされる。

そして新しい使命感をもって新たに仕事を始めようとする中産階級の女性たちが、意外にと言うべきか案の定と言うべきか、いかにも旧態依然とした階級意識を相変わらず拭いきれずにいたことも、見逃されてはなるまい。19世紀末、事務員や店員などの新しい「ホワイト・ブラウス職」に就いた女性たちの意識について、井野瀬久美恵氏は以下のように述べている。

2) 富山太佳夫「田舎では農民が...ーイギリスの農民文学」, 同氏編『文学の境界線』(研究社, 1996) 所収, P.134.

3) ケロウ・チェズニー『ヴィクトリア朝の下層社会』植松靖夫・中坪千夏子訳(高科書店, 1991), P.19.

彼らの給与や生活の実態は労働者階級とさほど差はなく、それゆえに彼らは別の形で労働者階級との差を示さねばならなかった。ホワイト・ブラウスの女性たちが自分たちの職業名とした次の呼称は、そんなメンタリティを端的に示しているといえるだろう。「レディ・クラーク」、「レディ・ヘルプ」——“レディ”を冠したこうした呼称は……労働者階級の女性たちとの差別化をはかろうとする、彼女たちの苦肉の策だったと思われる。⁴⁾

「レディ」に対するこだわりの背後に、中産階級出身者としての断固としたプライドと責任感が読みとれるのは確かだとしても、そこに過剰な階級意識にもとづく無用の差別感情がないまぜになっていたことは疑いようがないことであろう。「新しい女」の「新しさ」には、いくつもの盲点があったと言わざるをえない。

2

こうして多くの限界や欠点をもち、力みと裏腹の脆さをかかえながら、それでも何とか自力で歩き始めた「新しい女」の姿は、当然同時代の男たちの好奇心に満ちた耳目を集めることになった。その反応の多くは、風刺的週刊誌の『パンチ』に頻繁に掲載された戯画が表わすとおり、偏見をもった揶揄と底意地の悪い皮肉に色濃く染められていた。

流行のブルーマ姿で、大胆に自分からプロポーズしようとしている若い女性や、わがもの顔に自転車を乗りまわす一方で参政権にも興味を示す、ひどくデフォルメされた女性の姿が、趣向を変えつつ繰り返し描かれた。何しろ、「人類の進化論的な発達において、女性は男性より遅れているのである。『未開の人々』がヨーロッパの人間より遅れているのとおなじことだ。女性は成人してからも肉体も精神も子どものようで、男性と少年とを区別する髭などの特徴が発達してくることはない。女性の発達が途中で停止してしまうのは、出産のためにエネルギーを温存しておかねばならぬからである。そのため女

4) 井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』（講談社、1998）、P.31。

性は完全な成熟を達成できずにいるのだが、種にとっては、それはそれで益があるのである。」⁵⁾ といった歪んだ見解が、学問的体裁のもとに大手を振ってまかり通っていた時代のことである。労働の道や社会参加の道を選んだ女性に対する偏見は、「家庭の天使」を求める男性の側の身勝手な軟弱さや子どもっぽさを批判したくらいでは、とても片づかぬほどの根の深さをもっていたと言うべきだろう。

しかし、当時の男性小説家たちの中にも、「新しい女」に対して一定の理解と共感を示した者がいなかったわけではない。都会から離れた故郷のドーセットシャーに腰をすえて、ペシミスティックな社会批判や近代文明批判の作品を次々と著わしていたトマス・ハーディも間違いなくその一人である。たとえば『日蔭者ジュード』の中で、彼はシュー・ブライドヘッドという、研ぎすまされた感性と強い独立心に支えられた知的な女性が、結局は社会の因習や堅苦しい道徳に押しつぶされるように挫折していくさまを辿ってみせるが、その描き方は決して揶揄的でも風刺的でもない。なるほど人物としての造型に、やや曖昧で不明瞭な点を残すのは事実だが、むしろそこに見られるのは、手さぐりで新しい生き方を模索する若く未経験な女性の覚束ない足どりを、歪めずごまかさず、ただありのままに示そうとする、作者ハーディの誠実で共感的な眼差しの一貫性だというべきだろう。

それに比べると、もう一つの代表作『テス』のヒロイン、テス・ダービフィールドの場合にはかなり事情が異なっている。そもそも、たとえばかつてはノルマン貴族の末裔だったのであろうと、今はドーセットシャーの小村で農産物の仲買人を営む貧しい家庭の娘であるテスを、いわゆる「新しい女」に分類することにはいかにも無理があろう。けれども、たとえば「男たちの作った言葉で、女の感情は言い表せない」という名台詞を吐く『遙か群衆を離れて』のバスシバのような強引な行動力はないとしても、テスの場合は、控

5) シンシア・イーグル・ラセット『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』上野直子訳（工作舎、1994）、P22。同書には、当時流布した「男性の動きは女性よりもずっと正確である。それで一流のピアニストには男性が多い」といった珍妙な臆説も多数引用されている。

え目な態度の中に、意外なほど大胆で強靱な意志を垣間見せることがある。いわば自分を取り巻く環境によって、受身的に「自立」することを余儀なくされた女主人公ではあるが、最後には、自分の思いを貫くためなら罪を犯すことさえ辞さないという信念の強さを示しもする。たしかに都会的な洗練や知的向上心、権利意識などとは、ほとんど無縁な存在と言うべきだろう。しかし彼女の粘り強い考え方と果敢な振舞いの中には、ある種の「新しい」たくましさ、力強さがあると感じないではいられない。と同時に、その裏側には独特の微妙な弱さも潜んでいそうだ。テスという人物像に、作者は同時代の女性たちのかかえるどのような問題を投影してみせているのだろうか？作品のサブタイトルにある“A Pure Woman”という、しばしば議論の的となるフレーズを手がかりにしながら、考察を進めてみたい。

3

“A Pure Woman”という副題の言葉は、一見するとヴィクトリア朝読者の嗜好に訴えそうだが、明らかにそこには皮肉がこめられている。それも主人公のテスに対する、というより、読者自身に向けられた辛辣な皮肉であろう。その意味について十分な吟味を経ることなしに、作者のメッセージを理解することはできない。

テスは奉公先の屋敷の青年アレックにレイプされて私生児を生み、後に牧師の息子のエンジェルと出会って結婚するが、テスの過去を知った夫は取り乱して家を飛び出してしまう。経済的に行き詰まったテスは、改心して説教師になったアレックの誘いに負け、やむなく同棲するものの、やがて戻って来たエンジェルのために、結局はアレックを殺害するに至る——と簡単にプロットをなぞっただけでも、同時代の一般的な読者の目に、テスが“pure”と映りようがないことは、まず議論の余地があるまい。当時の女性が守るべきとされた徳目をことごとく踏みにじり、アレックの殺害についても「これは、どうしてもやらなければならないことでした」と、ためらいながらも大胆に言い放つその姿は、さぞかし多くの読者に眉をひそめさせたことだろう。

けれどもまさにそのこと、一般読者の“purity”の常識的観念を大きく揺さぶってみせることこそ、作者の狙いだったと思われる。

たとえば私生児に対するテスの態度の一端を物語るエピソードを取り上げてみよう。彼女が生んだ子は病弱で、生後まもなくして死んでしまう。何とか自力で育てようと決意していたテスの悲しみは深いが、せめて牧師の洗礼だけでも受けさせたいという彼女の願いも、妙にプライドの高い父親たちによって、素気なく一蹴されるばかりだった。やむを得ずテスは、幼い弟妹たちを集めて、覚束ない手つきながら自分自身の手で幼児に洗礼を施そうとする。

The little ones kneeling round, their sleepy eyes blinking and red, awaited her preparations full of a suspended wonder which their physical heaviness at that hour would not allow to become active.

The most impressed of them said:

‘Be you really going to christen him, Tess?’

The girl-mother replied in a grave affirmative.⁶⁾

(幼い子どもたちは周りを取り囲むように膝まづき、眠い目を赤くしばたたかせながら、ドキドキするような驚きの念をこめて姉の仕種を見守っていたが、何しろ夜更けのこと、どんよりと身体がだるくて、驚きの気持ちも弱まりがちだった。

一番心を動かされた子が言った。

「本当にテス姉さんが洗礼するの？」

まだ少女のような母親は、おごそかに肯定の返事をした。)

眠たい目をこすりながら、しぶしぶ儀式に参加させられている子どもたちの姿もユーモラスだが、洗礼の真意をただされた時のテスの返事を描写する“in a grave affirmative”という重々しい副詞句も、まだ幼さの残る“girl-

6) Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (Penguin, 1985), P145. 以後同書からの引用はすべてこの版によるものとし、本文中にページ数のみを示す。

mother”のとり態度としては、おそらく少なからず大仰で、一定のユーモアとアイロニーが感じられると考えてもよさそうである。

ただし、なるほどテスの未熟さは何度も強調され、彼女の子も「子どもが生んだ子ども」(“a child's child”)のようだとされる一方で、儀式に臨むテスに「ほとんど女王のような威厳」(“a touch of dignity which was almost regal”)があり、薄暗がりたたずむその姿が「異様に高く、堂々とそびえ立つように」(“strangely tall and imposing”)見えた、と描写されてもいることが見逃されてはなるまい。だからこそ弟や妹たちは、いつにない姉の態度を見て「畏怖に打たれた」(“awe-stricken”)思いで神妙にもなるのだろう。そして、こうした堂々たる「威厳」や「風格」こそは、どれだけ世間的な道徳を踏みはずそうとも、生まれた子どもに対しては可能な限りの責任を取りきろうとするテスの精神の強靱さの反映に他なるまい。そこには一点の迷いも悔いも見られない。だとすれば、先ほどの“grave affirmative”なる表現の中にも、ただの滑稽味とは異質の、ある種の荘厳さや厳粛さに通じるテス一流の“purity”が忍びこませてあると見なすべきだろう。

だが、話はただそれだけでは終わらない。逆境にもめげず、孤独の重圧にも耐えながら、テスが守り通そうとしているらしい“purity”に対して、作者自身、必ずしもそれをそのまま受け入れ、肯定しているようには思えないふしがあるからである。むしろテスのかかえる潔癖さへの過剰なこだわりを仔細に見つめるうちに、一体それをどのように捉えるべきかという本質的な疑問が、作者の中で次第に増幅していくように見えるのだ。さらに作品中の具体的なエピソードに即して、分析・検討を続けなければならない。

4

先に引用した手づくりのささやかな洗礼式の後、「パイプオルガンの基本和音のような声で」朗々と感謝の祈りを唱えるテスの姿には、信仰心と安堵感の織りなす確かな自信さえ感じられるようだ。

The ecstasy of faith almost apotheosized her; it set upon her face a glowing irradiation, and brought a red spot into the middle of each cheek; while miniature candle-flame inverted in her eye-pupils shone like a diamond. (P,145)

(信仰の恍惚状態は、ほとんど彼女に神のような風格を与え、顔には燃えるような輝きがともされ、両頬の中ほどを赤く染めていた。瞳にさかさまに映った小さなろうそくの炎は、ダイヤモンドさながらにきらめいて見えた。)

“apotheosize” とは重い意味をもつ言葉で、「神格化する」、「神のような存在に高める」ことを指す。早逝した子どもの魂の平安を祈るテスの一途な思いが、失意の中にある彼女のたたずまいを、少なくとも一時的に超越的で神聖な何ものかに変化させたということなのだろう。

しかし同時に、ここに用いられている “the ecstasy of faith” という表現には、微妙な揺れが感じられる。もちろんこの場合の “ecstasy” は、第一義的には「一心に祈るうちに我を忘れること」、「非日常的な忘我の境地」というほどの意味であろうが、すでにアレックとの不本意な接触の場面で、テスの若い女性としての性的・肉体的魅力を十分印象づけられている読者としては、いわゆる「官能的恍惚感」、「肉体性への無意識の没入」といったニュアンスを完全に拭い去って読むのはむずかしいことだろう。つまり、懸命に神聖な境域に参入しようとするテスの精神は、彼女自身の若々しく娘らしい肉体によってある意味で裏切られ、世俗的な感覚世界の中に引きずり戻されていくようにも見える。清純さへの飛翔と肉体性への拘泥がテスの中で共存しつつ、たがいに反発しあっているのだと言ってもよいかもしれない。頬にともされた「燃えるような」赤い色も、彼女の瞳に小さく映った「ダイヤモンドさながらに」輝くろうそくの姿も、そうした印象を補強することはあっても、決して消し去ることはあるまい。

同様の表現の「揺れ」は、ある程度の質的な変化を伴いながら、作品中に何度となく繰り返されている。特に「神聖さ」なり「超越性」なりと関わるも

のでなくとも、まばゆいほどの光や晴れやかさにテスが包まれる描写の後には、決まってそれに逆行するような、何かわだかまりを感じさせるイメージがその姿を現わすのだ。たとえば、過去の経緯を知らぬまま交際を始めた牧師の息子エンジェルとテスの心の絆が次第に強まる様子は、以下のような描写を与えられている。

Her affection for him was now the breath and life of Tess's being; it enveloped her as a photosphere, irradiated her into forgetfulness of her past sorrows, keeping back the gloomy spectres that would persist in their attempts to touch her....

A spiritual forgetfulness co-existed with an intellectual remembrance. She walked in brightness but she knew that in the background those shapes of darkness were always spread. (P.260)

(テスのエンジェルに寄せる愛情は、彼女という存在の息吹きとなり生命となった。それは光の輪と化して彼女を包みこみ、その全身を輝かせることで、過去のつらい悲しみを忘れさせるとともに、隙があれば彼女に触れようと迫ってくる陰鬱な亡霊たちを、できるだけ遠ざけてもくれた。....

だが霊的な忘却というものは知的な記憶と共存しうるもののようで、テスが輝く光の中を歩む時でも、背後には不気味な姿のうごめく暗闇が絶えずひろがっているのが感じられた。)

むろん “those shapes of darkness” が具体的に表わすものは、私生児を生み、ほどなく死なせてしまったテスの心の奥に潜む悔恨の情や、さらにはそれがエンジェルに知られた場合に起きうる破局への恐怖感などであるに違いない。けれども、むしろ一旦はきっぱりとした決意をもって「父なし子」の親となることを決めたはずのテスが、それでもそこに何ほどこかの「不気味な闇」を感じとってしまうのだとすれば、それは他ならぬ彼女自身の心の中に、どこかで汚れに満ちた日常世界を振り捨てて、清浄で超俗的な何ものかに抱かれ

たいという漠とした憧れが、いやしがたく潜んでいることの証なのではあるまいか。その憧れを託すべき相手がエンジェル・クレア（Angel Clare）という名の聖職者の息子であることは、いささか子どもじみた寓意性が露骨に感じられるくらいはあるものの、それもまた結局のところテスの「純粋な世界への憧憬」なるもの自体が、多少とも現実離れした子どもじみた夢想の域を大きく脱してはいないことを、皮肉に示唆しているのかもしれない。

いずれにしても大事なものは、どれほど「子どもじみて」いようが、それが「自然」の申し子のようなテスの本性にかなった欲求であり、彼女の本質を深め広げる力を担っているのなら、何の問題もないということである。だがむしろ実際はその逆で、テスの憧れは彼女の自然の姿を微妙にゆがめ、本来あるべき姿、故郷の大地に根ざした生き方から、彼女を遠ざけ引き離しているようにさえ見える。もう一度テスとクレアがつき合い始めた頃のことを念頭におきつつ、寄り添う二人の様子を描いた別の描写文を検討してみたい。

Thus passed the leafy time when arborescence seems to be the one thing aimed at out of doors. Tess and Clare unconsciously studied each other, ever balanced on the edge of a passion, yet apparently keeping out of it. All the while they were converging, under an irresistible law, as surely as two streams in one vale. (P.185)

（枝葉を広げて伸び育つことが自然の唯一の目標であるかのような、至る所に葉叢の生い繁る季節が通り過ぎていった。テスとクレアは無意識にたがいを観察し、情熱の深みの縁のところでどうにかバランスをとりながら、谷底に落ちぬよう踏ん張っているようだった。だがその間にも、抵抗しがたい法則に導かれるまま、ちょうど二つの川の流れがやがて一つの谷間に注ぎこむように、徐々に二人の気持ちは一つに重なり合っていった。）

“arborescence” というやや見慣れない表現は、まさに二人を包みこむ自然全体が、人間たちの賢しらの抵抗や配慮などものともせず、芽吹き、息づき、い

やましに殖え栄えるさまを彷彿させずにはまい。"passion"の世界に半ば魅せられ溺れそうになりながらも、何とかそこから身をかわそうとする二人にとって、自然を貫く "irresistible law" の存在はあまりにも重いと言うべきだろう。

しかしその一方で、すでに見たようにヴィクトリア朝的精神やモラルを肌身にしみこませたテスにとって、"purity" なる徳目の魅惑が断ちがたいというのもまた、抗いがたい事実である。たとえレイプを受け私生児を生んだ過去があろうと、だからと言って一方的に "impure" な存在だとレッテルづけされることに対しては、少なくとも心の奥で激しく反発しうる精神の強さをテスは備えている。それゆえ、彼女が単に世間の評判や体裁を気にかけるような小心翼翼たる生き方に陥ることだけは、確実に免れているのだが、それでもやはり「私は今もなお "pure" でありうる」と言わんばかりの姿勢は、つまるところ彼女の精神が、依然として常識的な意味での "purity" の威力、「清純さ」の魔力が根強く支配する圏域を、十分に脱けきっていないという事実をさらけ出すことになるのも、否定しがたいことだろう。"purity" の魔法の呪文は、どうあがいても簡単なことでは解けそうもない。"pure woman" という一見さりげない言葉は、かくも深々と主人公の心理を呪縛しているのである。

5

人間の生き方をなかば強引にねじ曲げ、有無を言わさず一定方向に誘導するかのような、いわば "purity" 信仰とも言うべきイデオロギーの蔓延に対して、ハーディが生理的な違和感を覚え、それに異議を唱えようとしているのは間違いない。「純粹」、「清純」といったいかにも口当たりのよいニュアンスを巧みに利用しながら、特に女性の人生観や価値観を窮屈な枠組みの中に押し込むばかりか、"pure" という単語本来の伸びやかさ、広やかさにも、一見それとは気づきにくい足かせをはめるような時代風潮には、一人の言葉の紡ぎ手として強く苛立たずにはいられなかったのだろう。

"pure" という語の元来の意味を辞典に求めれば、たとえば "free from anything not properly pertaining to it" とか "without any condition attached,

absolute, unconditioned”などの語釈を見出すことができる。⁷⁾つまり「外側からの余計な介入を免れた」、「自由にして無条件、絶対的な」といった意味合いが昔からこの単語の中核に宿っていたのだとすると、狭苦しい拘束を連想させる「純潔」、「清潔」などの硬直した意味は、少なくとも言葉のかなり片寄った一面を表わすものでしかないと思ふ以外あるまい。

そして、こうした本来の意味の“purity”の世界に身を任せることの喜びを十分知っていたとおぼしいハーディの真骨頂は、辛辣な社会批判を旨とする小説作品よりは、むしろ晩年に数多く残された叙情詩群の中に、時折りはっきりとその姿を現していると思う。決してあせらず、力まず、ごまかさず、自己や世界のあるがままの姿をまっすぐ見すえるという、やさしそうでむずかしい課題を、あくまで淡々とこなしてみせる詩人の姿は、彼にとっての“pure”な生き方なるものがどのようなものであったかを、何より雄弁に物語っているようである。たとえば、ふとした折りの心象スケッチとも言うべき“I Look into my Glass”という短い詩を覗いてみよう。⁸⁾

I look into my glass,
And view my wasting skin,
And say, 'Would God it came to pass
My heart had shrunk as thin!'

For then, I, undistress
By hearts grown cold to me,
Could lonely wait my endless rest
with equanimity.

7) 本文中に引いた語釈の例は、*New Shorter Oxford English Dictionary* (1993) にもとづく。

8) T.R.M.Creighton(ed.), *Poems of Thomas Hardy: A New Selection* (Revised Edition) (Macmillan, 1977) pp.109-10。詩人としてのハーディを知るには、James Richardson, *Thomas Hardy: The Poetry of Necessity* (Univ. of Chicago Pr., 1975), Charles P.C. Pettit (ed.), *New Perspectives on Thomas Hardy* (Macmillan, 1994) などが参考になる。

But Time, to make me grieve,
Part steals, lets part abide;
And shakes this fragile frame at eve
With throbbings of noontide.

(鏡をのぞきこんで、
しなびかけたような顔を見ながら
つぶやく―「心の方も同じくらい
しなびてくれればいいものを」と。

そうなれば私に冷たくなった人たちの
心のことなどもう気かけず、
平然とした気持ちでただひとり
終わりなき眠りの訪れを待てるだろうに。

だが「時」は、さあ悲しめとばかりに
半ば盗み去っても半ばはそのまま残し、
黄昏時を迎えた今なお、真昼のような
ときめきで老いた体を揺さぶるのだ。)

むずかしい言葉も、もってまわった表現もない。あたかも、静かな流水のような透明感のある言葉づかいがあるばかりだ。おそらくそれは、自らのわびしく老いを迎えつつある肉体と、それでも未練がましくうずく情熱の残り火とを、微苦笑をまじえながら暖かく包みこもうとする詩人のまなざしが湛える「透明さ」を、そのまま映し出しているのだろう。もしこれが、ハーデイの理想とする“purity”にかなり近づいた心境の表出であるとするなら、それはテスが憧れを寄せ、結局はそのために自滅していったとも言える“purity”の観念とは、いかにかけ離れていることだろう。そして“pure man”という表現のぎこちなさに比べて、“pure woman”という言い回しが、ほと

んど紋切り型の常套句として定着していることにもうかがわれるとおり、その両者の隔たりの中には、明らかに不当な形で女性に押しつけられた歪んだ“purity”の像が顔をのぞかせている。それは決して百年前の他人事として片づけられぬ、いまだ十分には解決されないままに残された重たい事実なのだと言えよう。